

ハト派・リベラル派の衣をまとった「安倍背後霊」政権
——岸田文雄新内閣の性格と限界

五十嵐 仁（法政大学名誉教授・法政大学大原社会問題研究所元所長）

〔以下の論攷は、『治安維持府と現代』2021年秋季号、第42号に
掲載されたものです。〕

はじめに

岸田文雄新政権が発足しました。久々の宏池会出身の首相です。岸田氏本人の真面目さや素

直さもあって、安倍・菅政権がまとっていた「安倍一強」支配の暗い影が払しょくされるのではないかとの期待もありました。岸田氏自身も「自民党が変わった姿を示したい」と抱負を述べています。

「新しい資本主義」を掲げて新自由主義から転換するかのようなそぶりも示しました。民主主義への危機感を表明し、当初は森友関連公文書の改ざん問題の再調査をほのめかしていました。「成長と分配の好循環」を掲げて、アベノミクスに否定的な印象も振りました。

しかし、それは事実でしょうか。自民党総裁選から決選投票、役員と閣僚人事をめぐる一連の過程を振り返ることによって、岸田新首相が陥ったジレンマと変わらなければならぬにもかかわらず変わることのできない自民党の現状を検証することにしましょう。

1. 「安倍支配」の復活

自民党の総裁選で注目されたのは、安倍元首相の暗躍でした。安倍氏はいち早く高市早苗前総務相への支持を表明し、猛烈な支持獲得活動を始めました。その結果、高市候補は、事前の予想を覆して国会議員票で河野太郎候補を上回りました。

安倍氏の威力を示したもう一つの例は、石破茂元幹事長の不出馬と河野太郎候補の失速です。安倍・菅政権を通じて「反安倍」だった石破氏は立候補を模索しましたが断念して河野支援に

回り、支援を受けた河野候補は自身の問題もあって岸田候補に敗れました。今の自民党では安倍氏にいらまれば居場所を失うということを示しています。

決選投票で高市支持票は岸田候補に回って勝利を確実にしましたが、それを指示したのも安倍氏だったと見られています。総裁選で勝利した岸田候補は、安倍氏の力によってその椅子を手に入れたことになりました。

このような安倍氏の力は自民党の役員人事でも発揮されました。盟友の麻生太郎副総理兼財務相を副総裁とし、松野博一官房長官など出身派閥の細田派からも多くのメンバーを党・内閣に送り込んでいます。

極右のタカ派で政策的には岸田氏と対極にあるはずの高市氏を政調会長として総選挙向けの公約づくりの責任者としたのは、政策より人事を優先したもので、背後にいる安倍氏の影響力を無視できなかったからです。ここには「変わった姿」を目指しながら変わらぬ「安倍支配」に依存しなければならなかった岸田氏のジレンマが明瞭に示されています。

高市政調会長のカラーは総選挙向けの重点政策にくっきりと現れました。「敵基地攻撃能力」とは書いていないものの「相手領域内」での弾道ミサイルなどを阻止する能力の保有を打ち出し、新たな国家安全保障戦略や防衛大綱を作成して防衛力を大幅に強化するとしています。防衛費についても「GDP比2%以上も念頭に増額を目指す」ことを明らかにしました。高市氏によって岸田氏は「カーキ色」に塗り替えられてしまったのです。

2、甘利明幹事長の衝撃

自民党の役員人事でとりわけ注目されたのは、甘利明元経済再生相が党運営の責任者である幹事長に抜擢されたことです。財政から人事、国会運営にまで影響力が及ぶ要の職に、疑惑の人物を据えたこととなります。この人事は大きな驚きをもって迎えられました。これも安倍氏への忖度によるもので、総裁選での借りを返す意味がありました。

甘利氏は経済再生担当相だった2016年1月、千葉県の建設会社からの依頼で都市再生機構（UR）へ移転補償金の値上げを、口利きした見返りに賄賂を受けとったと報道され、大臣を辞任しました。その後、「睡眠障害」を理由に約4カ月にわたって国会を欠席し、説明を拒否し続けてきたという前歴があります。

また、岸田新政権の「目玉」は「経済安全保障担当相」の新設ですが、その担当大臣に小林鷹之氏を起用したのは「甘利人事」と見られています。ソニー出身の甘利氏はこの分野の第一人者で、党の経済安保戦略を議論する新国際秩序創造戦略本部や党デジタル社会推進本部の座長でした。この新国際秩序創造戦略本部で小林氏は事務局長をつとめ、経済財政相になった山際大志郎氏も幹事長で甘利氏との共著を出しています。

これ以外にも、党役員人事への疑問は少なくありません。政調会長になった極右の高市氏に

はネオナチや在特会との親密ぶりを国連から警告されたことがあります。国対委員長になった高木毅元復興相は女性の部屋に進入して下着を盗み出した過去があり、現職の議院運営委員で中立性に問題が生ずるとして就任が先送りされました。組織運動本部長になった小淵優子元経産相も「政治とカネ」の問題で大臣を辞任しています。

構造改革・ワクチン担当大臣だった河野太郎氏の党広報委員長への「格落ち」人事は、総裁選で対立候補となったことへの「意趣返し」とみられています。当選3回の若手でありながら総務会長となった福田達夫氏の抜擢は重鎮やベテラン議員を取りまとめて、満場一致で党議決定しなければならぬポストへの押し込みで、「党風一新の会」を引き連れて河野・小泉側に走らなかったことへの論功行賞ポストが他になかったための苦肉の策だったのではないでしょうか。

3. 「食品サンプル」内閣の誕生

岸田新首相は自らの政権について「新時代共創内閣」と名付けました。国民と共に新しい時代を創造する内閣だとの意味を込めたのでしょうか。しかし、その実態は「食品サンプル」のような内閣です。色々と「美味しそう」な料理が並び、見栄えは良いけれども食することができないからです。

総選挙が終われば内閣改造となります。食べられたとしても約1カ月の「賞味期限」しかありません。しかも、予算委員会での質疑もなく、解散されれば事実上の選挙戦に入ります。各省庁を代表して国会での質問に答えたり、職務に専念したりする時間などありません。初めから「食べられないこと」が分かっているから、閣僚としての資質や適性などを無視して「美味しそう」に見える人を並べたわけです。

岸田首相がもつともこだわったのは派閥の均衡で、その次には老荘青のバランスと入閣待機組の処遇だったと思われれます。その結果、派閥の構成は最大派閥の細田派が4人、麻生派は3人、竹下派も4人、二階派は2人、岸田派は3人。無派閥から3人が入閣し、石破派と石原派からの起用はありませんでした。

首相を含めた21人の閣僚のうち、13人が初入閣となり、当選3回の若手を起用したのは、清新でさわやかな外見を凝らして生まれ変わった姿を示そうとしたからです。しかし、そのために「この人誰？」というなじみのない大臣が続出し、新内閣に対する「ご祝儀」が少なくなりました。支持率でも株価でも。

新閣僚も「政治とカネ」の問題などで疑惑をもたれている人は少なくありません。牧島かれんデジタル相については早速N T Tからの接待疑惑が報じられました。その他、金子恭之総務相、末松信介文科相、後藤茂之厚労相、金子原二郎農水相、西銘恒三郎復興・沖縄北方相、二之湯智国家公安委員長・防災相などの名前も浮かんでいます。『週刊文春』が「疑惑の玉手箱」

と書き、ボロが出る前に総選挙を実施したいと岸田首相が焦るのも当然でしょう。

過去の侵略戦争を肯定し美化する「靖国」派の議員も目白押しで、日本会議国会議員懇談会と神道政治連盟国会議員懇談会のいずれかに所属する自民党の閣僚は20人中17人に上っています。岸田首相自身、日本会議国会議員懇談会の副幹事長を務めていました。

4. 色あせた「岸田カラー」

岸田首相には前任者の菅首相とは異なった特徴があります。「聞く力」をアピールし、民主主義の危機、新自由主義の弊害、再分配や格差の是正、収入増などを強調する姿勢です。所信表明演説でも、「信頼と共感」「中間層を拡大する『新しい資本主義』」「国民との丁寧な対話」などの言葉が散りばめられていました。

このような言説は岸田政権が「安倍・菅政治」の後に登場したことを反映しています。前任者の政治運営によって生じた欠陥と問題点を無視できないからです。国民の声を聞かず、公文書の偽造で民主主義の危機をもたらし、信頼と共感を失い丁寧な説明を避けてきたために大きな批判を招きました。

共同通信の調査では、安倍・菅政権の路線を「転換するべきだ」との回答が69・7%にのぼり、朝日新聞の調査でも「引き継がない方がよい」が55%と半数を超えています。これでは「継承」

を謳うことはできません。とはいえ、はっきりとした転換によって「岸田カラー」を打ち出すこともできないところに、岸田首相のジレンマがあります。

典型的な例は、「成長と分配の好循環」の前提として「アベノミクスの3本の矢」である金融政策、財政政策、成長戦略の推進を挙げていることです。コロナ対策についても失敗への反省がありません。森友文書の再調査についても否定し、日本学術会議会員の人の任命拒否については見直す意向を示していません。選択的夫婦別姓についてもトーンダウンしました。「聞く耳」は形ばかりで実体がないのです。

安倍元首相が執念を燃やした改憲路線についても任期中に目途をつけるとして、総選挙向けの重点政策で「早期の憲法改正を実現する」ことを掲げ、「防衛関係費の増額を目指す」として日米同盟の強化と軍事大国化路線も引き継ぎ、辺野古の埋め立て続行を明言しています。「軽武装・ハト派」という宏池会の看板はイメージだけで内実がなく、色あせたものとなっています。

総裁選の時と首相になってからの発言の違いも注目されます。当初の令和版所得倍増計画は姿を消し、新自由主義については「転換」ではなく「弊害」の指摘にとどまり、金融所得課税は実施しないことになりました。これらの発言も、総裁になるための見掛け倒しの看板にすぎなかったのです。

「安倍色」を「岸田色」に塗り替えて独自性を示すチャンスを逸したということになります。

安倍・麻生・甘利の「3A」が「おんぶお化け」のようにとりついているため、地金はそのままに、表面の「コーティング」でごまかさざるを得なかったのです。ここに「安倍背後霊」政権を担うことになった岸田首相の限界があります。

実は、「岸田色」を打ち出すのは簡単でした。「憲法9条は変えない」「平和国家としてのブランドを守る」と言いさえすればよかったです。宏池会の元会長で大先輩に当たる古賀誠氏は「憲法9条は世界遺産」という本まで書いていますから。でも、そうしていたら、今の自民党では総裁になれなかったでしょうけど。

5、奇襲と逆襲の総選挙

自民党総裁選直後、岸田新総裁は10月31日投票での総選挙実施という方針を明らかにしました。新しい内閣が発足する前に解散・総選挙の日程が速報されるという異常事態です。これまで解散から投票までの最短は20日でしたが、今回はこれよりも短く17日しかありません。まさに「奇襲」です。

それは新内閣発足直後の「ご祝儀相場」で支持率が上がることを狙ったためと見られていますが、新政権の本質がばれないうちに選挙に打って出ようとしたのかもしれないかもしれません。しかし、こ

のような姑息な奇襲の意図は見抜かれていたのではないでしょう。内閣発足直後の支持率は、朝日新聞の調査では45%と2001年以降最低となっています。

この奇襲攻撃に対して、すでに野党は迎え撃って逆襲に転ずる準備を重ねてきました。市民連合と立憲・共産・社民・れいわ4党の政策合意が実現し、立憲・共産両党の党首会談では限定的な閣外協力が合意されました。各小選挙区での統一候補の擁立も進み、289小選挙区中300以上の選挙区で「1対1の構図」づくりが実現しています。

コロナ禍から国民のいのちと暮らしを守るという課題からしても、野党共闘の実現によって与野党が正面から激突するという対決構図でも、政権交代を展望して共産党が協力するという点でも、これまでにない歴史的な総選挙となりました。まさに、日本の命運がかかった選挙となっています。その結果次第で、政治のあり方と日本の進路は大きく左右されることになるでしょう。

しかし、総選挙の結果がどうなるにせよ、参議院は自民・公明両党が多数を占めています。たとえ、衆院で与野党の勢力が逆転し新しい政権が発足しても衆参の勢力関係が「ネジレ状態」になるだけで、法案や予算案を通すのは極めて困難です。

もし、野党の連合政権が樹立されれば、来年7月の参院選で野党が多数を獲得して「ネジレ状態」を解消することが次の課題となります。そうならなくても、与野党が激突する激動の情勢は、来年にかけてしばらく続くことになるでしょう。

ハト派・リベラル派の衣をまとった「安倍背後霊」政権

岸田新首相は菅前首相とは必ずしも同じではないということに注意する必要があります。菅前首相は官房長官として安倍内閣を中枢で支え、正面から安倍政治の「継承」を掲げていました。しかし、岸田新首相は「新しい資本主義」への転換を標榜しています。菅前政権のコロナ対策や説明しない政治の失敗を目撃し、そこから学んでいるという違いもあります。

何よりも、岸田氏はハト派でリベラルとされる宏池会の会長でした。ハトとして飛び立てる翼の一部が残っているかもしれません。総裁の椅子を手に入れるために魂を売り渡さざるをえなかった屈辱をわずかでも感じていれば、「安倍政治」とは異なった方向を模索する可能性もあります。

とりわけ、岸田新政権が経済政策で再分配重視や格差是正に転じ、中間層へのアピールを強めた場合、野党にとっては手ごわい相手となるでしょう。数十兆円規模の経済対策や子育て支援など総選挙向けの口当たりの良い「撒き餌」や、安倍・菅路線の継承という地金をごまかすための「コーティング」に惑わされてはなりません。

自民党にとっては、このような外見をまとっている岸田氏であるからこそ、利用価値があるということになります。岸田氏からすれば、そのような外見を強めようとすれば右傾化した自

民党の地金と衝突し、安倍元首相や麻生副総理、甘利幹事長などからの牽制を受けざるを得ないというジレンマに直面することになります。

「ハト派・リベラル」の衣の下には「安倍背後霊」政権の本質が隠されているからです。そのカラクリを野党や国民は見抜くことができるでしょうか。この点においても、総選挙の結果が注目されます。